

COMMENT:

「とことん外で体と心を使って遊ぶことが
“生きる根っこ”を作るんです」

NPO法人あそびっこ代表・中川 奈緒美さん

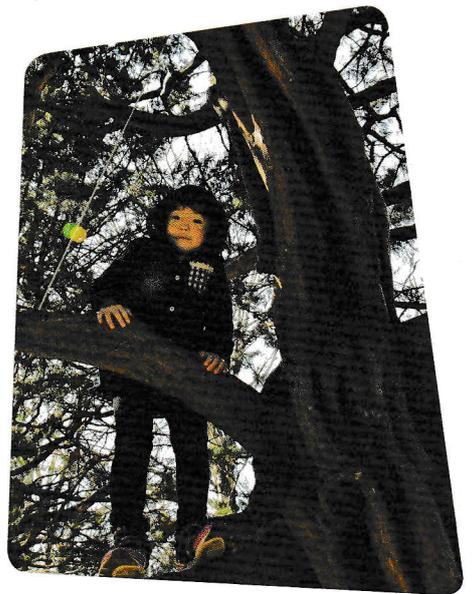
東

京都練馬区にある光が丘公園。その一角で週末ごとに開催されているのが、「光が丘ひろっぴ プレーパーク」です。開催場所の「芝生広場南」は、大きな木が何本も立ち、なだらかな土手もある、整備された公園のなかでもすきまみたいな場所。そこでは、走り回る子、くっつきあ



ってしゃがんで何かを無心に触っている子、穴をひたすら掘っている子など、下はよちよち歩きから上は小学生高学年、中学生まで200人を超えている子どもたちがはじけるような笑い声とエネルギーを撒き散らして遊んでいます。

このプレーパークを管理するNPO法人あそびっこ代表・中川奈緒美さんは、その様子を見ながらこう話してくれました。「プレーパークでは、子ども同士が刺激し合います。例えば、大きなスコップを使いたくて穴を掘っていた低学年に、高学年の子が『横に広げて水路を作ろう!』と声をか



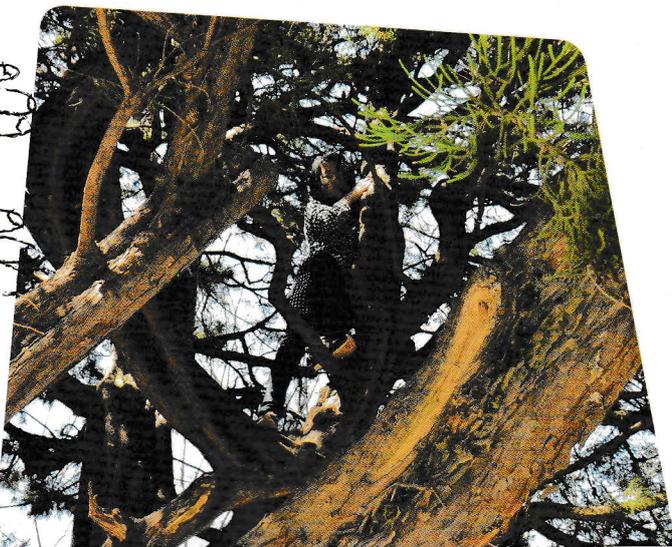
け、ふたりで迷路のような水路を構築しながらバケツで水を流していたら、小さな子が濡れた土を丸める団子作りを始め、いつの間にか、小さな子も大きな子もいっしょになって『光る泥団子』作りに興じている……そんな遊び風景が頻繁に見られるんです」。

自然や道具を自由に使っている、異年齢が集まっている、それだけの環境が揃えば、子どもの発想は無限大に広がります。遊びは発展するんですね。しかし小さな子の親は、我が子が大きな子の真似をして高い木に登りたがるなどの危険が心配になります。

「異年齢と一緒に遊んでいると、子どもは今の自分の力量を自覚します。いつか自分も、大きな子がしていることをやりたい。その思いが意欲になります。まずは子どもがやってみて、少し怖い思いや痛い思いを体験することも必要ですよ」。確かに、大人から見ると危なげなことが

は、やる前に止めてしまおうことが多いですが、それでは子ども自身ができるかできないか判断する機会を奪ってしまいません。「子どもは遊びながら、考えて、試行錯誤して、悔しい思いや達成感を味わって、自分や人を認めるようになって……生きる力の根っこを育てています」と、中川さん。

生後2カ月の女兒を抱いての参加だった中島智佳子さん（38歳、長男9歳、次男6歳、三男3歳、長女2カ月）は、「友だちといっしょに何かをすることがあまり得意





COMMENT:

「あー、楽しかったってキラキラして帰ってくる子どもの姿を見られるのがうれしいです」

保護者・中島智佳子さん



光が丘ひろっぱプレーパーク

会場：都立光が丘公園

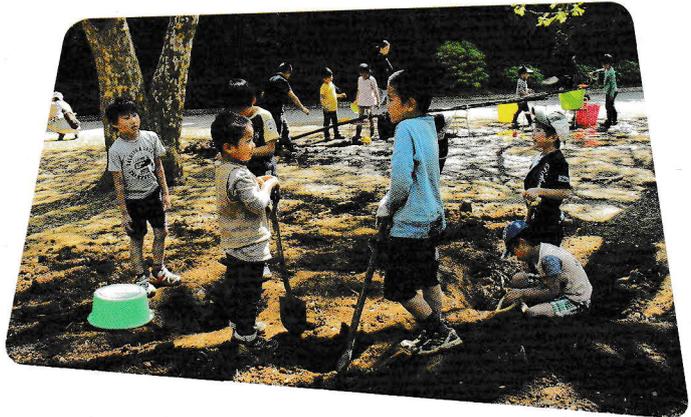
芝生広場南側

開催日時：土・日曜 10時～17時、

ただし第2土曜は「ちびっこDAY」として10時～13時30分開催

でなかった長男が、ここでは、いろんな子との関わりから幅を広げているようです。また、下の子たちを連れて来ても、それぞれが、あー楽しかった、おなかすいた！と帰れることに大満足です」と話してくれました。

自然体験教室などに参加させたり、キャンプに出かけたりするのももちろんいいですが、家の近くにあるならプレーパークに通うのもいいものです。外での自由な遊びが日常としてあるのは、子どもと大人の心を耕すかけがえのない体験。野外で子どもを遊ばせるとこんなメリットがありますという謳い文句は、「木登りしよう！」「どんぐりを拾おう！」と目をキラキラさせて飛び回っている子どもたちの前では色褪せる……と感じた半日でした。



参加してきました。 年に一度の大イベント「こども商店街」

光が丘ひろっぱプレーパークは毎月、公園近隣の小学校9校に6,000枚のチラシを配布しています。今回取材に訪れたのは、毎年年度末に開催する「こども商店街」という大イベントの日。チラシで出店者の募集をし、応募してきた子が、どんな店にするかを考え、商品を作り、店を建てて、当日の販売までをする企画です。お店やさんごっこ？ いえいえ、頭のなかにあるイメージを現実にしていくことは“ごっこ”を超えた遊び。子どもたちは試行錯誤を重ねながら思いを実現していくそうです。

さて、どんな店が出来上がっていたのかといえば、木の枝にロープで木材を吊るして作ったブランコにお客を乗せて揺らしてあげる「ブランコ屋」、手作りの「毛糸シュシュ屋」、四角い箱型の家の天井の穴から家の中にハシゴで降りることができる「??屋」、人力で走る「バス屋」など。どの店も、店主たちの本気が溢れる、奇想天外で魅力的な店ばかりです。そして、500人を超えるお客さんも、みんな楽しんでいました。出店者の保護者・久保田美奈子さん（40歳、長女8歳、長男4歳）は、「長女はプレーワーカーと一緒に竹林まで竹を切り出しに行ったり、

真剣に向き合っていました。終わった今、“こども商店街”になるほど（笑）。

中川さんは、「企画準備期間は約1カ月。最初のイメージでは実現できず企画を変更した子、店構えを建てる技術がなく他の店の子に手伝ってもらった子。あの手もこの手も、何でもOKです。店を出すことに意味があります。そして、今年はお客さんだった子が、1年後に出店者として応募してきてくれたら、イベントは大成功です」。子どもの遊び？ いや～、子どもの本気を見せてもらいました。子どもの遊びはいつもで本気。こんな体験が、子ども時代にたくさんあることは幸せですね。

